

日本人の、日本人による、日本人のため にならない捏造——V

「中国の旅」の捏造——1

田辺敏雄氏の膨大な労作・検証からの引用であるが、なるべく忠実に再現しましたが、細かい部分的な改竄は、話をわかりやすくするためにしてあります。誤解をうけたなら、それは筆者個人の能力によるもので、責はすべて筆者にあります。

東京裁判を正当化しようとする朝日新聞を初めとする一部の狂信者による史観を「東京裁判史観」とか「自虐史観」などと称する。すでに Pal 判事により完膚なきまでに論破されたものを、いまもって信仰している連中のことである。朝日など金科玉条にしている。この裁判で、日本軍による大虐殺があった、と判定されたのをうけての「捏造」だろうと思う。日本人にとって迷惑なことこの上ない。

日本軍の犯したとする残虐事件、残虐行為をごく普通の日本人が知った経過をみると、大きな節目をいくつか指摘できる。

ひとつ目は、GHQのプロパガンダ（宣伝）である。

たとえば東京裁判がそうである。捏造だらけで、今次戦争を日本の「侵略戦争」と断定することである。そういう意味では真実の姿からは程遠い実体であった。占領軍司令部GHQの占領政策の戦略は、日本が再び立ち上がれないよう弱体化することで、鉄鋼、造船など重工業をになう財閥解体。航空機にいたっては、製造はもちろん、研究までが禁止された。よっぽど「零戦」に懲りたのやろネ。つまり、元の農業国家にもどす意図があった。有耶無耶にしてしまうと、恨みだけが残ってしまう。……実質的には、日本と日本人は腑抜けになっていただけのことである。

GHQは、昭和20年（つまり終戦の年）12月から、新聞、ラジオ、雑誌、映画など、あらゆる媒体を通じて情報操作を行った。

江藤淳は、「閉ざされた言語空間（1989年）」のなかで、「この『プログラム』が、以後正確に戦犯容疑者の逮捕や、戦争裁判の節目々に時期を合わせて展開されて行ったという事実は、軽々に看過することができない。つまりそれは、日本の敗北を『一時的かつ一過性のもとしか受け取っていない』大方の国民感情に対する、執拗な挑戦であった」と指摘している。

GHQの宣伝にはいくつか数えあげることができるが、すでに述べたメディアを最大限駆使することである。新聞連載の1回目に「南京大虐殺」。12月8日、つまり開戦記念日からである。「このとき実に2万人の市民、子供が殺戮された。4週間にわたって南京は血の街と化し切り刻まれた肉片が散乱していた。婦人は所かまわず暴行を受け、抵抗した女

性は銃剣で殺された。ある家では3歳の子供が突き殺され・・・」(朝日新聞)とある。…………

(その後、こういうことは朝日新聞の特徴になっていき、捏造の嵐が吹きまくる。) 女子供は殺さないと兵士は言っているし、強姦されるときに抵抗しない女性もいないだろう。それでも殺すことは基本的にはない。「はだしのゲン」は、捏造をもとに漫画化したもので、子供に見せるかどうかなら、見せない方に賛成する。(南京大虐殺については稿を改める。)

NHKは12月9日から「真相はこうだ」を放送し始める。真相を知る元日本兵から抗議が殺到し、10回で打ち切られたというから、**宣伝に踊らされない常識が健在だった**。NHKは手を変え、やはり同じようなことを繰り返す。(平気で嘘を垂れ流すNHKの体質はこの頃すでに芽生えている。) これが、究極的には東京裁判に到達する。予定通りである。

しかし、1945年からの必死の宣伝教育も功を奏せず、(日本国民の精神、矜持などはともかく、)教科書に記載されるようになるのは1980年代のことである。つまり朝日新聞などによる教科書誤報問題以降のことである。ここから「日教組が諸悪の根源」と揶揄されるようになる。事実、日教組が教えてきた戦争史は、ウソばかりだった。

ふたつめの節目は、中国から戦犯として抑留されていた約1000人の帰国(1956年)である。彼らは完全に**洗脳**されていて、ありもしないことをペラペラ喋って、あるいは手記として、中国に残してきた。翌年「中国帰還者連絡会」(中帰連)を組織する。そしてこの会の活動がマスメディアに頻りに流される。…………喋らないと、あるいは書かないと日本に帰さないぞ、と脅かされて書いたものだ、と言えど誰も責めないのになあ。

これらの人々の証言をまとめたものから、神吉晴夫が「三光」を著わした。ここに**生体解剖、細菌実験、毒ガス攻撃、劳工狩り**などありとあらゆる残虐な行為を自ら犯したとする日本兵の口から語られていた。おおよそ人間の所業とは思えないほどの、吐き気を催すほどの…………とあるけれども(三光についても稿を改める)大ヒット作になった。ところが先にソ連に抑留されていた人々の間から反発が出て、絶版を余儀なくされた。要するに「虚構・捏造」である。

3つめは、1971年朝日新聞に連載された本多勝一の「中国の旅」である。…………ボクは学生時代だったが、日本人がここまでするだろうか?と常に違和感を伴い、結局全部を読みきれなかったような記憶がある。

この時期、「文化大革命を中傷し、国内状況をゆがめ、反中国の行為に出た」として、北京駐在の報道各社の特派員は国外退去処分を受け、朝日新聞だけが残った。広岡知男社長が「中国の良い点は書き、悪い点は書くな」と記者に指示した事実がある。…………それじゃあ、書くことがなくなってしまうじゃないか。

この「中国の旅」は、「平頂山」「万人坑」「南京」「三光政策」からなる。

記述に間違いがあると抗議した人に対して、本多は、恥ずかし気もなく、「私は中国側の言うのをそのまま代弁しただけだから、抗議をするのであれば、中国側に直接やってほしい」と回答しているから、「記事の原点」である真実かどうかの検証をまったく行わず、向こうの言い分を日本語で書いただけのものである。その後も、この程度の学者、報道人、研究者と称する連中が同工異曲のことを書き散らし、「検証」は置き去りにされてきた。

時を同じくして「天皇の軍隊」が書かれたが、匿名に見せているようであるが、著者は本多と長沼節夫。山東省の59師団が、討伐作戦というのは、「女あさりにカップライ」だったと証言する。いかに軍紀が乱れてもそこまではしないだろうと考える人はいなかったはずがないのだが。「日本兵の証言」というが、「中帰連」のことである。

1982年（昭和57年）日中国交回復後10年、文部省検定の教科書に「日本軍の華北侵略を進出に書き換えさせられた」と朝日新聞がご注進におよんだが、誤報だった。

その後もしつこく、「新編三光」を出版したが、巻頭の写真が明治時代のもので、三光から見れば偽者だったことがわかって絶版。ところが、井上ひさしは「この1冊は日本民族を鍛え直す砥石である」と絶賛し、野間宏は、『『胎児』は妊婦を圧殺する記録である。このようなものを抹殺したいものだと考えながら、決して日本人、世界の人々の前から消してはならないと内なる声を聞く」と、まったく信用しきっている。彼らの書く文章も、これと同じく虚偽に満ちているのだろうか。

森村誠一が「悪魔の飽食」で七三一部隊について「赤旗」に連載したが、資料や写真は自分でさがしたものでなかったらしく、写真がでたらめだったことや、証言者が自分のことの記述を批判するなど、国内で論争が起り、これも自然消滅の形で終わってしまう。

さらには、職業的詐話師の吉田清治の朝鮮人慰安婦強制連行や、南京大虐殺の証言者として中国で英雄視される東史郎の「わが南京プラトーン」などが書かれるが、デッチ上げと判明するまで10年以上かかる。（初めからウソとわかっている、その証明には時間がかかる。）

さらなる節目が1992年の朝鮮人慰安婦の軍による強制連行で、朝日新聞が「捏造」しながら2014年8月に誤報と認めたものである。NHKも同罪。秦郁彦教授の現地での調査や韓国人学者の調査でもみとめられなかったものが、河野談話として残る。

その後、中国に抑留された鈴木啓久師団長の「自筆供述書」のなかに、中国人女性を強制的に連行、慰安婦にしたとする供述があることが判明すると（無論、捏造です）大々的な報道になる。マスメディアは、疑似餌にも飛びつく修正があるらしい。この時期に日本軍の悪辣ぶりが次々と報道されるが、すべて田辺敏雄氏の綿密な検証がある。

1997年、米国在住のアイリス・チャンの「ザ・レイプ・オブ・南京（The Rape of Nanking）」

が上梓され、米国中を騒がすが、カリフォルニア大学のジョシュア・フォーゲルが指摘したように「分析の観点に顕著な偏向がみられ、数々の歴史的事実を誤認している。チャンが記述する、日本では〈「南京事件」研究は逼塞させられており、〉研究者たちには研究を不満とする勢力からの圧力で〈職や生命を失う危険がつきまとう〉、〈安全を危惧する中国政府は自国の研究者たちの日本訪問を滅多に許さないとされる〉などの内容は、**為にする虚偽の記述である**。・・・などなど多数の米国の日本史研究者によるチャンの著作に対する批判がなされている。日本では苦笑いするのみで終始した。

たとえば、「中国人の男は銃剣の訓練と首切り競争に使われた。推計では、2万人から8万人の中国人女性が強姦された。多くの兵隊は強姦だけでなく、女性の内臓を取り出し、胸を切り刻み、生きたままで壁に釘で打ちつけた。父親は娘を、息子は母親を家族の目の前で強姦するように強制された。生き埋め、去勢、内臓を切り刻み、人々を焼くことなどが通常のこととなっただけでなく、もっと悪魔的な拷問、たとえば舌を鉄のカギにつるしたり、人を腰まで埋めてドイツセパードがバラバラにするのを眺めることもした。その様子は吐き気を催すもので、街にいたナチスも恐怖に陥れ、一人はその虐殺を“野獣の所業”と公言した」・・・何をおっしゃる。すべて中国人の知恵から発生したものではないか。日本人には、そういう発想はない。中国人はこのようにして残虐な行為をおこなうという例ではないか。いろんな中国人の犯罪や事件から見て、彼らに共通している。

この本が出版されたとき、日本大使館の外交官が「すでに謝罪している」と言ったというが、ありもしないことをなぜ謝らねばならないのか。せめて中国や朝日の捏造くらいは知っておくべきだ。そうでなければ、外国人は、日本人がそういう行為をした、と受け止めてしまうじゃないか。外務省無用論がでるのも当然ではある。

米国もまあ、偉そうなことは言えない。原爆を落とし、B29で各都市を絨毯爆撃し、グラマンで一般市民を狙い撃ちしたのは米国人じゃないか。(後述しますが、外国人の中でも反対論が根強い。)日本軍なんかよりも、米中の方がはるかに残虐です。

田辺氏の話を整理すると、

- 1) 東京裁判と占領軍のプロパガンダ
- 2) 現地ルポ

現地に行って“被害者”の話聞き、首を傾げたくないような残虐度の高い話を報道し、論文を書く。当然加害者への追求は熾烈になる。加害者とされる日本側の裏づけをとらない、ことが特徴

- 3) 中国抑留者

「手記」や「供述書」、それに活動家たちの「証言」である。検証を省いて、既定の事実としてメディアが取り扱う。これには、突拍子もない残虐行為が多く含まれる。

4) 虚偽の証言者

「詐話師」と呼ばれる。南京事件だけでも東史郎、曾根一夫、中山重夫をはじめ、馬鹿にならない数。また、大して悪意はないものの、取材相手に迎合して伝聞やウワサを自分の体験として話すケースも少なくないようである。ニューヨーク・タイムズの一面を飾った話がそうで、人肉食について、日本兵が少年を殺して食べたという話を書いたもの。佐官クラスの将校が、この少年をさがしにきたとき、ちょうどすき焼きを食べていた。珍しく新鮮な牛肉だったので、「この肉がそれではないか」とみんなが大笑いした、という話。荒唐無稽なのが、「佐官が行方不明の一少年をさがしまわる」はずがない。・・・それでもピューリッツァ賞をとったというから、権威のない話。ニューヨーク・タイムズは、日本が嫌いだから。青山繁晴氏によると、チャイナ・マネーがはいっているから、という。

5) その他

一般の証言者。時間の経過とともに記憶違いや錯覚が多くなる。このため、ひとつの事柄でも、複数の証言があるか、資料の裏付けがあるか、関連する事柄と整合性があるか、などの検討が大切である。ひとりの証言だけでは、信憑性に乏しい。

1. 平頂山事件

1931年9月が満洲事変。1932年（昭和7年）3月1日、日本軍部の主導により、宣統帝溥儀を執政に、満洲国が誕生した。これにより日本の進出に反対する勢力、いわゆる反満抗日活動が活発化し、張学良軍の残党など、各地に出没するこれら「匪賊」に日本軍は手を焼く。

9月を機に満洲全土で一斉蜂起がつつたえられた。満洲最大の炭鉱である撫順炭鉱のある撫順市にも匪賊襲来を満洲日報が伝えている。

守備する側は、一個中隊（260名）、炭鉱の自衛組織である防備隊650名、在郷軍人が多く、武装し戦闘能力があった。それに憲兵隊10名余、計1100名あまり。守備隊は鉄道守備隊で、鉄道警備が本務。

嚴重態勢のなか、数百の匪賊が三方向から深夜に急襲した。逆を衝かれて日本側は慌て、混乱し、日本人5名死亡（炭鉱職員4名）重軽傷者数名で、炭鉱各地から出火した。結果、炭鉱は操業不能。敵は数十の死体を遺してひきあげた。

翌日、平頂山村の住民が匪賊を手引きしたという理由で、近くの崖下の空き地に集め、

機関銃を使用するなどしてほぼ全員を殺害した。犠牲者は約 600 名前後と思われる。17 日以降、防備隊の手で遺体を重油で焼こうとするが、焼ききれず、崖をダイナマイトで崩して埋めた。

終戦後、国民政府軍の軍事法廷で、当時の炭鉱次長以下 6 名の炭鉱職員と元警察官 1 名に対して死刑が先刻された。この炭鉱関係者は、軍部がいなくなっているために被告にされたもので、まったく関係がない人々で、まったくの無実である。

中国は事件について、「平頂山大屠殺惨案始末」という 30 ページ余りの報告書を出した。1964 年か 65 年のこと、誤調査、誤解釈などで説明できないデッチ上げが各所にみられる。

当然ながら、中国は記念館を建てる。人骨を並べた記念館。「戦闘詳報」はみつからないが、その他の日本側の資料はほぼ出尽くした。

中国は被害者を 3000 人と主張。現場の守備隊員は約 600 名という証言。事件後 1 ヶ月に満洲日報は、400 人の死者があったと報道。リットン調査団の 700 余名などを根拠（根拠不明）に、田辺氏は 400～800 名の犠牲者と推定し、著書を出した。

ところが本多は、「侵略と無差別虐殺などについて、一切の反省のない立場から書き、虐殺数を過少評価している」という。

過少評価というならその根拠を示すべきだが、なに、中国の言い分を丸呑みにしているから、書きようがない。みっともない話だが。「一切の反省のない立場」とは具体的に何をさすのか定かではないが、反省したから被害者数が増減するわけもない。

1995 年、死刑判決を受けた久保炭鉱次長の「申弁書」が発見された。「判決書に言ふ理由は、被告久保孚に関する限り総て真相に該当せず」として再審を訴えるために 1948 年 2 月に提出したもの。B4 版のザラ紙 7 枚の裏表に書かれている。「其人数 700 及び 800 と伝えられたり、其の時刻 16 日午前 11 時頃と記憶す。以上は被告が 16 日早朝以来、炭鉱事務所に於て、昨夜来の襲撃被害に対し前後措置を講じつつある午後 3 時頃に接したるものなり・・・」

事件当日川上守備隊長が討伐行動中で居ないことは知れ渡っていて、この隙を狙われた。ところが、この隊長主導の下に、同村襲撃の謀議の様子が詳述されている。しかも隊長が陣頭指揮をしている。謀議に参加した通訳などの証言が根拠だというのである。

「田辺がこの申弁書の存在を知るのは『追跡平頂山事件』を書き上げてから 7～8 年もあとのことであるが、申弁書の内容とほとんど変わらないその調査結果は出色である」と誉められたそうである。

2. 万人坑・・・中国各地に存在する

1995年村山トシ吉が、訪中時盧溝橋のほとりの「中国人民抗日戦争記念館」の掲示が、死傷者2168万5000人から3500万人に書き換えられていた。石井明東大教授がその根拠を中国の軍事科学院軍事歴史研究部の責任者に確かめたところ、「軍事科学院が日中戦争中の中国軍民の死傷者数の調査を始めたのが1988年。近年、東北で60近い「万人坑」が見つかった。こうして新しいデータを加えて検討した結果、死傷者3500万人という結論に達し、中央にこの数字を採用するように提案した」

そして1988年11月、江沢民が来日し、早稲田大学の講演で、「中国の軍民が死傷し、6000億ドル以上の経済的損失を受けた」と述べ、日本の「侵略の歴史」を厳しく非難した。

この江沢民は、天皇主催の晩餐会でも無礼な発言をしたのにもかかわらず、和歌山に銅像を建てるなどという話も聞こえてきて、バカじゃなかるか。作るなら南方熊楠だろうが。

満洲で最大の炭鉱、撫順炭鉱（満鉄経営）には30～40ヵ所の万人坑、犠牲者は25万～30万人。その他の炭鉱にも何ヵ所か、何万人ずつかの万人坑があり、吉林省の豊満ダムも1万5000人の万人坑がある。つまりは、日本経営の鉱山や大規模な工事現場には、かならず万人坑ができた、と中国が説明し、それぞれ記念館が建立されている。

これら万人坑は、国家ぐるみの巨大なウソだと言いつづけてきた。

予備知識が必要になる。

1945年8月、日本の敗戦とともに、南満洲の各地はソ連軍、つづいて共産八路軍の進駐をうけた。ソ連軍は60万人以上もシベリアに抑留し、各地で日本軍民を動員、発電機などの重要設備を撤去し、貨車で自国内に運んだ。3万両という。

ソ連軍の撤退後、残った八路軍と南から国民政府軍（蒋介石軍）との間で国共内戦があり、まもなく共産八路軍（中共軍）は駆逐された。

日本人の引き揚げは国府軍の下で行われ、国共内戦で勝利する中共軍の再進出は、日本人の帰国後のことである。

国府軍占領下の1946年7月から47年11月まで、瀋陽（奉天）で軍事法廷が開かれ、これが唯一の法廷で、起訴された135人中死刑22名、無期刑5名、有期刑29名、無罪79名。平頂山関連で7名死刑、4名無罪。憲兵、警察官、満洲国官吏で死刑を宣告された人も多い。

万人坑が在りえたか

1) 万人坑容疑の捜査はなかったし、逮捕者もでていない。

万人坑についてはウワサ話もでていない。

- 2) 今日に至るまでソ連、国府軍から万人坑のことは言っていない。共産中国だけが言う。また、労働者の中には、技能が高いとの理由で、中国人より優遇された朝鮮人が数十、数百の単位で働いていたが、彼らからも何も伝わって来ない。
- 3) 撫順炭鉱の統計で、日本が経営していた 1907 年から 1941 年まで、現地人の死者累計は 600 名、日本人は 138 名。死者全員の姓名は「満鉄遺芳録」に記され、哀悼の意が表されている。
- 4) ダムを管理下においた国府軍は、張徳恒をダムの責任者として送り込んできた。彼は、ダムを経営する満洲電業の技術監として日本人とともに働いていた。技術官は全部で 10 人。9 人が日本人で、現地人は張徳恒ひとり。現場を熟知している。張がいる限り、虐待が事実なら無事に済むとは思えない。
- 5) 炭鉱事故の多くは、坑内掘りによる。(日本でも戦後何回も悲惨な事故があった。) 南満鉄業は露天掘りである。

現地人の最大の死亡事故は、1941 年 7 月の鉱石を運ぶ貨車 3 両の脱線転覆事故で、死者 6 名重傷者 15 名のものである。死者が伴う事故はめったになく、起こりようもなかった、と勤務経験者は一様に語る。

だが、推定犠牲者 1 万 7000 人なる万人坑が発掘され、記念館まで建てられた。

- 6) 中国の教科書は、大同炭鉱の万人坑を「20 ヶ所あまり」と記載している。現場と労務行政に詳しい根津司郎が単身で記念館長を訪れ、万人坑がなかったことを細かく説明した。先方は「この次までに調べておきます」。根津は、「中国の計画的デッチ上げ」と言う。
- 7) 1975 年発行の中国の書籍「甲申雑記」に「熙寧八年餓莩無数作萬人坑」とあり、「万人の屍を一穴に葬ること」と説明されている。餓莩は「がひょう」と読み、餓死者を意味する。

1941 年当時ハルピン郊外に「貧民義地」と呼ぶ公営墓地が 3 ヶ所あり、これを万人坑と呼んでいた。奉天郊外にも万人坑の存在の記録がある。中国は土葬で、行き倒れなどの死体は当時は珍しくなかった。墓地がどこにでもあるのは中国だけではない。掘って骨が出るのに何の不思議があろう。

- 8) 撫順には日本人戦犯を収容した監獄があった。平頂山事件の現場で方素栄という生き残った証言者から、佐々真之助師団長をはじめ多数が「学習」のため話を聞かされては反省を迫られる。だが、現にあるはずの近くの万人坑に連れて行かれたという話はない。絶好の学習・反省材料であったろうに。また、日本人戦犯が遺した「供述書」に万人坑に関する記述があったことは確認されていない。

- 9) 炭鉱職員やその家族、その地に住む民間人など、田辺氏の調査した 300 人のうち万人坑を見た日本人はただの一人もいなかった。多くは知らないと答え、残りは存在するはずがないと答えた。東京撫順会でも同様に、労働者の酷使も強く否定し、残虐行為についても「ばかばかしい、荒唐無稽である」という反応が多く返ってきた。
- 10) 田辺氏の調査中、産経以外の新聞記者、テレビなどの報道陣、学者に一人として出会わなかった。また調べた痕跡も皆無であった。要するに、メディアは日本側から調べずに報じ、学者はこれに追随して教科書、百科事典などに書いて嘆いて見せたのである。
- 11) 「中国の旅」掲載直後、南満炭業の元専務らが、朝日新聞社を訪れ、記事撤回を要求したが、門前払いも同然だった。同様の要求もすべて無視であった。
- 12) 本多勝一は抗議をした撫順炭業の元職員に「私は中国側の言うのをそのまま代弁しただけですから、抗議をするのであれば中国側に直接やっていただけませんか。中国側との間で何らかの合意点が見つかったときには、それをまた本で採用したいと思っています」(1985年3月9日)

となると、記事および記事の検証責任はだれが負うというのだろうか。

2014. 08. 29.